

年間第13主日

マタイ 10・37-42

2020.6.28

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

東京の修道院で、インド人の神父様と中国人の神父様と3人で生活をしています。同じ神様を信じ、修道院に住み、同じものを食べていても、それぞれ意見が違いを感じる場合があります。

例えば、香港の民主化を求めるデモを見ながら、「香港にいるクラレチアン会の人は何も発信しないのはどういうことだ」というようなことを中国人の神父様は怒ったりする。「香港にいる信者さんにポルトガルに亡命を考えている会の恩人がある。しかし彼女はもうクラレチアン会の人との関係もこれっきりだと怒っている」と話してくれたりする。その理由はクラレチアン会の人々が香港について何もコメントしないからだと言う。それを聞いてなるほどと思う。

しかしそれを聞いていたインド人の神父さんの方は、当局に目を付けられて面倒くさいことになったら困るだろうし、家族も困るだろうから、必ずしも何か言うわけにはいかない」と意見が対立する。

次に、アメリカの黒人差別の反対のデモを見ながら、今度は中国人の神父様は「トランプは中国の共産党をやっつけようとしているのに、この人たちは全然そういったことを理解しようとしてないし、デモをやりながら略奪もしているからこれは悪いことだ。香港のデモでは略奪はないけど、こういった黒人のデモには正義がない」という。トランプの側近だったバイデンの暴露本も、「あれは嘘」だっていう評価となる。

同じ信仰を持っていても全然違うことを毎日の生活の中で痛感します。同じ神様を信じ、唯一の神様のみことばである福音は一つなのだけど、とらえ方は全然違います。クラレチアン会は福音宣教を目的とする修道会ですけれども、会員一人ひとりとは同じような考えを持っているわけではありません。

今日の福音では「息子や娘よりも神様を大切にすることが求められる」と言われます。天の父の息子となった血のつながらないわたしたち三人の兄弟の中で、どれが神様の意見を言い当てているのか？と質問しても正直よくわかりません。

わたしたち一緒に住んでいるのは息子や娘じゃなくて兄弟ですけれども、ではわたしたち兄弟の三人の意見のどれが神様の意見に近いかというと、正直わ

からないです。しかしどこに天の父のみこころがあるのか？ということの日々探求しなければなりません。そのポイントとなるのは今日の福音を手掛かりに考えると、預言者を預言者として認めることとなります。神に選ばれて宣教活動している人がいつも正しいわけではなく、預言者を預言者として認めるかどうかにかかっています。

神様のことばを預かった人のことばが本当に神様のことばだと信じることができるか。それから、小さな者に冷たい水を飲ませるようなことができたかどうか、その二つであるとなります。ですから偉大な人間のことばではなく、人の知恵から見ると取るに足りない、家造りの捨てた石が隅の親石となるような、神様のことばを神様のことばとしてまず受けることが求められています。

預言者とは神様のことばを預かる人のことですから、神様の思っておられること、その思いがどこにあるのかということをおたしたち共同体も探さなければなりません。ですから偉い人が言っていることばに振り回されるのであれば、あまり神様のことばをおたしたち自身が語っているということにならないと思います。同じマタイの福音書には、「神様の思いというのは偉大な者、知恵ある者には隠して、幼子のような者に示されます」(マタイ 11・25)とありますから、神様のことばは遠くに探しに行かなくても、意外に近くにあると思います。

弱い立場の人のことばを吸い上げていく姿勢をおたしたちは求められるのではないか、それが小さな者に冷たい水を飲ませる行為になるのではないのでしょうか。

ですから、アメリカや香港のデモを見たときに、いったい誰が弱者で、どこからの声が響いているのかということをお聞かなければなりません。翻って日本の社会の中を見てみたときに、日本の社会の中にたくさん問題があり、強い立場の発言に注目が集まりますが、弱い立場の人のことばに耳を傾けるときに、神のみこころがどこに向かわせようとしているのか、それがわかってくると思います。もちろん、弱い人は天使ではありませんから、自分の弱さを認めることができず、神の道から離れて単に強くなりたい人かもしれませんし、おたしたちに危害を与える可能性もあります。その時には神様のことばを生きる者として、毅然とした態度を示さなければならぬこともあると思います。

第二バチカン公会議以降、共通善(時代や国を超えて人が追い求めていくべきもの)という価値基準を大切にし、人の尊厳を守ることはその一つであると考えられます。

この考え方からおたし個人は、現実の社会の中で、何が本当に人間を人間とし

で扱っているのかと考えるようにしています。わたしたちの修道生活もたぶんこんな調子でこれからもずっと続いていくことになるのでしょう。

わたしたち救われた神の子にとってはっきりしているのは、この世の救いというのは、神様のみこころをこの地上で生きること、偉い政治家が発言や、専門家の意見はもちろん、参考にはなりません。しかし、わたしたちはそれを超えてまず神様のみこころがどこにあるのかということを探します。

このコロナの状況下の中でもいろんなことを言われていますけれども、そんな中においても神様のみことばは一体どこにあるのか、それを探し求めていく姿勢が大切だと思います。

社会の意見は風のように変わっていき、風見鶏のようにそれに逆らわないのが、賢い生き方なのかもしれませんが、神のことばを見つけた時には、逆風となったとしてもそのことばに従うことができますように。